

2015年3月3日



第62号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その56

すずむら たか し
鈴村多賀志さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.



1959年埼玉県生まれ。環境計量士。
とろく みなまた
土呂久公害問題をへて、1983年頃から水俣病患者とかかわりを始めた。同時に三里塚に関心を持ち、「田んぼくらぶ」の活動に携わる。水俣病溝口訴訟弁護団東京事務局員。実験村通信読者

—いま「田んぼくらぶ」では、どんなことをされていますか。

ももとは、横堀で熱田一さんの用地内にある田んぼでお米を作っていました。「わくわくツアー」という企画があって、その中での田植えや稲刈り体験が始まりです。で、そのツアーが終わったあとも田んぼでお米を作ろうというので、十数人が中心になって、「田んぼくらぶ」を立ち上げました。2006年9月23日に最後の稲刈りをしましたが、その時、熱田一さんの息子の誠さんまことから、「あの田んぼは、父から譲り受けたことになっていたが、名義はそのままだった。自分としてはこのまま続けてほしかったが、

残念ながら空港の手に渡ることになってしまった」との話がありました。その後、どうするか話し合いを続けていたところ、東峰の石井紀子さんから、畑をやってみないかというお話があり、じゃあ、やってみようかと。畑は東峰の周辺の夜番やばん、十余三とよみ、川上かわかみというあたりです。だいたい月1ペースで畑に行っています。

—どんなものを作っていますか。

春はジャガイモの作付け、夏からさつまいもを作っています。今年は3月7日にじゃがいもを作付けします。去年はさつまいもの出来が良くなかった。一年ごとによくできたり、できなかったりの繰り返しですかね。

—鈴村さんといえば、三里塚では、騒音調査でお世話になった人という印象があります。

何度か、やらせてもらいましたね。仕事が環境調査なものですから、騒音や振動については守備範囲なので。最近では、3年ぐらい前ですか、七つ森書館の中里さんの依頼を受けて調査して報告書を提出しました。

—他にも、1992年12月の第2ターミナルビルの供用開始に伴う騒音激化の前後や、2002年のサッカーワールドカップにともなう暫定滑走路による騒音調査でも鈴村さんの協力が不可欠でした。その記録の一端が「着陸不可—日本の玄関」に「東峰騒音測定報告」として、掲載されていますね。

はい。騒音は、そこで暮らす人たちにどんな影響を与えているかが重要です。WECPNLという測定方法は国際基準でもなく、平行滑走路の問題でその欠陥が露呈され、またいろいろ計算式が変わるそうですが、実際に100デシ

ベルぐらいの騒音に苦しめられている住民の身になって考えなければと思います。

一話は変わりますが、土呂久公害から水俣病患者訴訟への関わりの中で、現在の活動について教えてください。

2013年4月16日、水俣病認定を争う訴訟で、最高裁第3小法廷は溝口さんを水俣病と認めた福岡高裁判決を維持、Fさんの水俣病を否認した大阪高裁判決を破棄し差し戻しました。事実上の勝訴判決といえます。しかし、2014年3月7日、環境省は水俣病認定に関する新通知を発出しました。この新通知は、最高裁判決に逆行し、従来の審査内容に固執するというものです。そこで、この新通知を差し止め、

また新通知による認定審査をしないよう求めた訴訟を、東京地裁に提訴しています。まだまだ水俣病患者の救済を目指す活動は続きます。ぜひ、支援をお願いします。

インタビュー：高橋千代司

注：2011年5月28日（土）、コア・いけぶくろ（豊島区民センター）で開催された「空港と原発—巨大科学技術を考える—」の資料の中で、2月5日に鈴木さんが計測した騒音調査の記録が掲載されている。

「着陸不可—日本の玄関 新東京国際空港36年目の現実—」（七つ森書館）

水俣の訴訟 「溝口訴訟」「Fさん訴訟」



3つのプロジェクトからの報告

子どもや孫の世代に

先月（2月）14日に2014年度の麦・大豆畑トラストの収穫物を発送いたしました。

2014年度の収穫物の配分は一口につき大豆が3kg分、小麦が3.6kg分（大豆は、大豆のままと生味噌にして、小麦は小麦粉とうどんにしてお届けしています）と昨年度に比べると大幅な減収となってしまいました。

原因は、麦・大豆ともに、生育初期の除草が間に合わず雑草の勢いに負けてしまったことだと考えています。現在、畑では麦が生育中です。こちらは麦踏みや草取りを実施したおかげで順調です。

食や農をめぐる現状には問題がたくさんです。耕作放棄地、低い自給率、TPPなど、このままでは子どもや孫が大きくなったときには大丈

夫だろうか、と不安になることばかりです。

僕が麦・大豆畑トラストの担当となって3年が過ぎようとしています。麦・大豆畑トラストの取り組みのいいところは、つくることと食べることが限りなく近いことだと思っています。このふたつの距離があけばあくほど問題は大きくたいへんになるような気がしています。

ささやかではありますが、これからも麦・大豆畑トラストを通じて、子どもや孫の世代に明るい未来を残せるようにがんばっていきたくと思います。

麦・大豆畑トラストへのご参加・ご支援をよろしく願います！！

麦・大豆畑トラスト／金森史明

夕立の森から 里山の再生法をもう一度考える

一日きこりの常連の一人が、夕立の森に隣接する斜面のガサヤブに取り組んでいる。「傾斜地は大変だろう？」という私の声かけをよそに、わが道をゆくスタイルで悠然と作業を進めている。私はというと、「夕立計画」がはじめに傾斜地に取り組んで苦戦したことがトラウマとなって、つい平地部に体がいつてしまう。楽だし作業面積が稼げるのだ。

去年、別の常連が森づくりの本を紹介してくれた。農文協発行の『図解これならできる山づくり』他1冊。写真やイラストが豊富で、それに説明も大変にわかりやすい。そして驚いた。なんと、写真やイラストがすべて傾斜地での作業として描かれていることだ。

考えてもみよう。日本の国土の大半は山また山の急傾斜地だ。わずかな平坦部に多くの人々が住み市街や田園となっている。急傾斜地と平坦部との間には丘陵地帯があるが、勾配の緩やかなところには里があり、ここもひとが住み菜園や果樹園や牧となっている。里の山がちなあたりに、かつては堆肥材料や薪炭材になるナラやクヌギの落葉・広葉樹の林があった。これが里山。里人が頻りに立ち入り、いただきものをし、手入れもしていた。里山のさらに奥、急峻な山地の森が奥山。ここまではめったに里人は入らない。もっぱら山の民、プロのきこりの領分だった。今この里山・奥山がともに荒れている。上述の本だが、里山の森、奥山の森、両方を視野に入れている。解説の図版がすべて傾斜地なのは当然だ。題名も『これならできる山づくり』となっている。

里山の再生という場合、荒れた原因も、その仕事の困難さも地面の傾きにあるのかもしれない。里山の再生とは傾斜地の植生をいかに回復させるかということなのかもしれない。だとすると、森づくりとは、傾斜地の植生と付き合うことだ。

今「夕立計画」では、夕立の森からはみ出た隣の杉林の掃除を手がけている。この作業がす

んだあとは、夕立の森の乗っている台地の肩から谷津田面までの斜面に取り掛かることになる。それまでに、傾斜地の意味についてももうすこし考えてみたいと思う。

北総大地夕立計画／平野靖識

農のネットワーク

実験村がネットワークを組んでいるグループは数多くありますが、今回は「TPPに反対する人々の運動」と「アジア農民交流センター」から取り上げます。両グループはこの3月8・9日に合同で年次寄り合い（総会）を東京都内で開きます。8日は午後から、シンポジウム、反TPP運動の今後についての討論、懇親会を行い、翌9日はアジア農民交流センターの年次寄り合いを午前中に行います。シンポジウムでは山形・小国町、東京・山谷、労働運動から「郵政産業ユニオン」、埼玉・秩父から、地域と人々の自立の取り組みを報告し、討論します。

毎年実験村が協賛し、ブースも出している「国際有機農業映画祭」は2014年12月14日、東京・豊島区の武蔵大学で開催しました。第8回に当たるこのときのテーマは「流れに抗う」。時代への抵抗としての有機農業の原点を見つめ直す企画としました。ゲストには、実験村村民でもある山形・置賜の百姓菅野芳秀さんに来てもらいました。

農と食のネットワーク／大野和興



(写真は同映画祭で上映されたインド映画「有機農業が拓く地平」から)

小さなアリは巨象に挑む

七つ森書館 vs 読売新聞社

2011年11月11日、読売ジャイアンツの清武英利球団代表・GMが、球団会長で読売新聞社主筆の渡邊恒雄氏に重大なコンプライアンス違反があると告発する記者会見をおこないました。そのため、清武氏は解任されたばかりか、1億円の損害賠償訴訟をおこされたのです。

私たち七つ森書館は、2010年から「ノンフィクションシリーズ“人間”」の刊行を開始しました。ドキュメンタリーの良書を復刊し世に広める企画で、監修・解説は評論家の佐高信氏です。この時すでに6冊を発行していました。このシリーズに『会長はなぜ自殺したか——金融腐敗=呪縛の検証』（読売新聞社会部。1998年新潮社刊、2000年新潮文庫）を入れようと企画し、2010年12月から読売新聞社と交渉を始めました。交渉は順調に進み、著者名を「読売社会部清武班」とすることも合意し、2011年5月9日に出版契約を結んだのです。本書の取材記者もつとめた読売新聞社会部次長（当時）が交渉の窓口となって読売新聞社の法務部門と協議した上で結ばれた出版契約です。

その半年後に、清武氏の内部告発でした。2011年12月1日、読売新聞社は七つ森書館に「出版契約を解除したい。補償はお金です」と申し入れてきました。私たちは「良書を復刊するのが『ノンフィクションシリーズ“人間”』の目的です」と理解を求めました。読売新聞社は代理人同士の交渉もうまくいかないと見るや「出版契約無効確認請求事件」として東京地裁へ提訴しました。2012年4月11日のことです。

読売新聞社の主張は「出版契約を結ぶ権限を有していない社会部次長が署名しているから無効である」というもので、出版契約書の無効を申し立てたのです。出版契約にいたるプロセスをまったく無視しているばかりか、読売新聞社内の規則にすぎないものを社会一般の論理と見せかけて押し通すものにほかなりません。出版差し止め訴訟へ持ち込めなかったからです。その後、『会長はなぜ自殺したか』の著作権は、読売新聞社にあるとまで主張しました。

5月17日、外国特派員協会で記者会見を開

き、翌18日、第1回口頭弁論の後に司法記者クラブで会見して、21日から全国書店で発売すると発表しました。読売新聞社は「販売差し止め処分」を申し立て、取次会社と書店に販売しないように求めましたが効果なく、書店店頭では販売が続行されました。23日、今度は「出版差し止め請求処分」を申し立て、スラップ訴訟に戦術を変えてきたのです。

このように、巨大メディアである読売新聞社が、小出版社の七つ森書館を訴えることによって出版を妨害したのです。多大な時間と訴訟費用の浪費を迫り、自らの主張を押し通そうとするものです。われわれジャーナリストにとって社会的正義は何よりも重く、言論・表現の自由は社会的正義を守り抜くためにあることを忘れてはなりません。

これ以後裁判がつづきましたが、仮処分は一勝一敗一引分、本訴の判決が昨年9月12日にありましたが、勝訴には至りませんでした。判決では、「社会部次長に契約の権限があるかどうか確認しなかった七つ森書館が悪い」という内容でしたから、記者会見で「裁判長の常識を疑う」とコメントしておきました。控訴しましたので、裁判は続きます。

この数十年で、どれだけの巨大企業が膨大な利潤を奪っていったことでしょうか。どれだけの多くの貧困層が生まれていったことでしょうか。このような社会の矛盾を監視していくのがジャーナリストの眼なのです。清武氏は本書執筆中に、経営陣に対して「おかしいじゃないですか」と叫んだ社員の声が忘れられないといえます。私たちアリのように小さな存在が、巨象のように大きな読売新聞社に対して、おかしいことはおかしいと言って誤りを正していくことが重要だと思ふのです。少年少女のような考え方もかもしれませんが、私たちは少年少女時代の美しい心を忘れません。



七つ森書館 中里英章

柏崎刈羽原子力発電所のこと

山下茂

100万kw級の原子炉が7機もある柏崎刈羽^{かしわざきかりわ}原発は世界最大である。建設計画を東京電力が発表したのは1969年、ただちに反対運動が始まった。この年は東大安田講堂事件ほか全国の大学は学園紛争でゆれていた。70年安保、沖縄返還をひかえていて世の中全体が騒然としていた。三里塚では強制土地収用がせまっていた。

三里塚の反対同盟の青年行動隊は「全国オルグ」で原発をはじめ各地のいろいろな反対運動の現場に出向いた。柏崎にも行った。三里塚と柏崎の交流がもたれたのは言うまでもない。

以降の流れをざっと見てみよう。

- 70年 三里塚 強制土地測量
- 71年 三里塚 第一次・二次強制代執行
- 78年 柏崎 1号機着工
- 三里塚 4000m滑走路1本で開港
- 85年 柏崎 1号機運転開始
- 86年 三里塚 2期工事着工
- 91年 三里塚 空港問題シンポ・円卓会議
- 94年 三里塚 地球的課題の実験村スタート
- 97年 柏崎 7号機運転開始
- 02年 三里塚 暫定滑走路供用開始
- 03年 柏崎 全号機停止 東電の不祥事
- 04年 柏崎 中越地震
- 07年 柏崎 中越沖地震 全号機停止
- 09年 柏崎 一部運転再開
- 11年 柏崎 東日本大震災 全号機停止

柏崎では土地収用をめぐる争いはほとんど聞かない。三里塚のように豊かな農地ではなく、海岸縁の荒涼とした砂丘だからだろうか。当時飛ぶ鳥を落としていた田中角栄^{たなかかくえい}がすでに買い占めていたのかよく分からない。ちなみに彼の実家から原発まで10km程度。事故即避難。彼には福島のような事故ではなく原発で潤う故郷を想像していたのだろうか。今、柏崎の街中の丈夫そうな公共施設は「原子力災害時 退避施設」の看板が寂しげに貼ってある。

07年の地震では消火用のパイプが破断した。

火災を消火できず、ようよう柏崎市消防署に通報。消防車が出動して消火活動にあたった。あわやメルトダウンだったとも聞いた。「今でも消防車のサイレンを聞くと『原発は大丈夫か』とおふくろは言うんですよ」昨年11月に柏崎で開かれた“さよなら原発”の集会で聞いた参加者(※)の声である。

7機のうち3機は07年の地震で停まったまま、そして3・11で残り4機も停まった。このまま廃炉にしたい。が、原発作業員を乗せた大型バスが柏崎市内を通り抜けていく。原発は停まっても冷却作業なんかが必要し、なにより再稼働に向けた工事をすすめているのだろう。

“モノの循環の視点から地域自立を考える。地域に内在する再生エネルギーを引き出し自給を高める”～実験村の地域自立のエネルギーの価値観からみると巨大な原発は要らない。柏崎では原発反対のさまざまな運動が続いている。でも三里塚との交流は70年頃だけではなかっただろうか。三里塚に招いたり、柏崎を訪れたり、実験村とのこれからの交流をはかりたいと思う。

^{はすいけかおる}
※蓮池 董氏：元東電社員、拉致被害者の兄、家族会の元事務局長、柏崎市在住。



次号以降、柏崎原発の現状や諸問題について掲載を予定しています(編集長)

JVCタイ農村インターン 近況報告



開発のあり方を学ぶために東北タイに来て、もうすぐ半年が経ちます。農村では、基本的に有機農業を営む農家に住み込んで、農作業を手伝いながら一緒に生活をしました。日本にいた頃は、農業とは大変で苦しい仕事で、東北タイは貧しい暮らしにくい土地だと思っていました。でも、実際に暮らしてみると、そんなことはありませんでした。

今まで、日本の暮らしは便利で快適で、豊かであると私は信じて疑ったことがありませんでした。しかし、タイで農に関わりながら暮らしてみて、自然と共にある暮らしにどれだけ癒され、地域の密な人間関係にどれだけ助けられたかわかりません。東京にいるときは、必死に勉強して、良い仕事を見つけないと生きていけないような気がしていました。しかし、農村で初めて知ったのは、暮らしを自分で賄えることの安心感でした。

暮らしに必要な衣食住医は、本来は森など自然から賄えることを学びました。また、東北タイでは物も、時にはお金も、気前良く分け合うことを知りました。そうした助け合いの文化さえあれば、いつも安心して生活できるのだと分かりました。

とはいえ、子どもを進学させたり車を買ったり携帯を買ったり、農村でも現金の需要がますます増えているのもよく分かりました。一緒に暮らしてきた人たちが時折こぼす愚痴といえば、決まって「お金がない」でした。経済発展の進

むタイですが、単に生活が消費的になるだけでは、私たちはいつまでも苦しむ続けるのではないのでしょうか。

タイでは、1997年のアジア通貨危機以降、国王の提唱する「足るを知る経済」⇒【ことば】の考え方に倣って、持続可能な開発に向けたの取り組みが進められています。日本にも「少欲知足」という言葉があるように、食の価値を考え、支えてくれる人々がいる有り難みを知ることこそ、開発を単に便利さを追う営みにさせないために必要な智恵だと思いました。

岡田 佳子

【ことば】

足るを知る経済

Sufficiency Economy

タイ王室は農業、林業、小規模工業等に関する各種プロジェクトを実施しており、その目的は「人間の自立のための開発」とされ「持続性の原則」が掲げられている。2005年にはタイ外務省と王室開発プロジェクト委員会により「代替的な開発：足るを知る経済」に関する閣僚会議が行われ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの国々から19カ国の大臣も参加した。また「足るを知る経済」哲学と王室プロジェクトによる農業に関する新理論は、アフガン復興支援において持続可能な農業支援の手段として利用された。



年次寄合いのお知らせ

「イスラム国」による邦人人質殺害という衝撃的事件で幕を明けた2015年ですが、ようやく春の訪れが感じられるようになり、実験村の「年次寄合い」開催の季節となりました。

TPP交渉の急進展が危惧された昨年でしたが、今年は「戦後70年」ということでTPPや食糧自給問題などが後景に追いやられ、安保法制や首相談話に注目があつまりそうです。それでも原発再稼動とか円安による輸入食料品の高騰など、人々の生活と密接に関わる「食と農」をめぐる地球的課題が軽減されるわけでもありません。

今年も、そんな課題に向き合いつづける実験村の活動にとって大切なことや提案など、村民のみなさんの忌憚のないご意見をお聞かせください。

2015年 地球的課題の実験村 年次寄合い

日時：4月12日（日曜）
10時30分～

会場：夕立の森

→寄合い終了後、懇親会を予定しています。

日暮里⇒京成成田⇒芝山千代田
8:39 9:52 10:01

活動予定

3月21日(土)	北総大地夕立計画	山仕事
4月12日(日)	年次寄合	
18日(土)	北総大地夕立計画	山仕事
4月・5月	麦大豆畑トラスト	草取り
5月16日(土)	北総大地夕立計画	山仕事
6月	麦大豆畑トラスト	麦刈り

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身の暮らしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

○村民費	3000円
○麦大豆畑トラスト	5000円
○通信購読のみ	1000円 ※年3回

郵便振替 00140-3-92555
地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX：0476(26)1654 平野

メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL：http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/

【編集後記】

去年の大雪に懲りて、気象庁が大雪注意報を出してはハズれる珍事がつづきましたが、「都会の大雪」は今後もあるのでしょうかね。実験村通信の62号には、4月の年次寄合いのお知らせを載せることが出来ました。村民のみなさんと久しぶりにお会いできるのを楽しみにしています。(K)

■編集・発行／2015年3月3日「地球的課題の実験村」

■購読料／年間1,000円（年3回）

■62号編集担当／佐々木希一・平野靖識

■共同代表／柳川秀夫 千葉県山武郡芝山町香山新田22
大野和興 埼玉県秩父市大宮5734-4